

## ブルガリアにおける情報伝達手段の利用に関する調査報告

総合研究大学院大学  
比較文化学専攻  
ヨトヴァ・マリア

### 1. ブルガリア調査の概要

ブルガリアの中規模の町カザンラクに住んでいる人々（10人）を中心にコミュニケーション手段に関するアンケート調査を行った。また、首都のソフィア及びその郊外にある町、ボテフグラドで5人の協力を得て、同様のアンケート調査を行った。アンケート協力者はティーンエイジャー3人、20-40歳代6人、41-60歳代6人である。10代の若者は高校生である。大人は学校教師、自営業者、マネージャーなどの仕事をしている中流階級の人である。年配層の中で携帯電話などのハイテク機器があまり普及していないため、携帯電話を中心にしたアンケートに関して協力を得るのはかなり難しかったのである。2007年11月上旬に各インフォーマントへ調査用紙を渡し、空いている時間に自宅にて記入してもらい、11月下旬に返送してもらった。

### 2. ブルガリアにおける情報伝達手段の状況

1989年、鉄のカーテン崩壊以降、ブルガリアは大きな政治的・経済的・社会的変化を迎えた。非社会主義政権の下で、市場経済化と土地の私有化、国営企業の民営化がすすめられてきた。国家開発戦略上の重点分野として情報通信業、観光業、農業、運輸業が位置づけられ、外資誘致が重要な課題として重視されてきた。このような政策が進められた結果、ブルガリアに拠点を作るソフトウェアなどの外資系IT企業も増加しており<sup>1</sup>、ブルガリアへの観光客やビジネス客が著しく増加している。それに伴い、ホテル・レストラン、流通業などが活況を呈している上、携帯電話など情報通信関連分野も急速な伸びを示している。その中で通信手段として代表的なものに焦点を当て、以下の調査を行い、ブルガリアにおける傾向の把握に努めた。

#### 2.1 携帯電話

携帯電話を保持しているブルガリア人は全人口750万人に対して70.3%であり<sup>2</sup>、そのうち、インターネット接続経験者は33%である。そして、携帯電話の使用台数は970万台なので、ブルガリア人の人口の約半分は2-3台の携帯電話を持つというデータになる。更に、2001年に携帯電話を保持している人の割合は31.1%に対して、2007年は2倍以上増加し、また収入に対する携帯電話及びIT関連の支出の割合も2004年対比で2倍以上増加している。

10-17歳の子供たちの間では携帯電話はごく普通に普及している。携帯の普及に関する調査によると、彼らの親は皆、子供とのコミュニケーションをいつでも取れるよう安心感を得たい、また家族の結束をより強めたいという動機で携帯電話を持たせる必要があると思う人が多い。それに対し、子供たちはファッション感覚、および学校などのグループへの帰属意識が強いため、携帯電話を持つ必要性を強く感じているのである。

一方、携帯通話料金は割高であるといわれ、それに対して実際に費用を安く抑えるような対策を考えている人がいる。例えば、必要な時以外はできる限り電話を使用しないこと、携帯電話会社の提案する安い料金プランに加入すること、また一部の人によると会社の携帯電話をプライベートと同じ位置づけ(?)で使用す

<sup>1</sup> その背景にはブルガリアはコメコン時代に、コンピューターの生産・開発を担っていた経緯もあり、理数系を多く輩出している。またそうしたソフトウェア企業で働くブルガリア人技術者の数も増えている。

<sup>2</sup> 2007年の国家統計局データより。対象年齢層は16歳から74歳まで。

ることもあるという。一方、個人的差が多いため、何も対策をとらないという人も少なくない。彼らにとってコミュニケーションは、お金よりも大切であるという認識から通話料金を節約しないと思う人もいるのである。ブルガリア人にとって携帯電話はコミュニケーションの上で重要なツールとなり、気持ちや親しみを込めたプレゼントとして認識されているのである。例えば、クリスマス、誕生日、ネームデー、記念日などに特別なものとして渡されることが多い。その背景には携帯電話会社がクリスマスなどの祭日に大きなプロモーションを掛け、安価な通話プランの推奨や割安な機種の販売など行っていることがあるといえる。

## 2.2 携帯メール

ティーンエイジャーの中で一番流行しているコミュニケーション手段。彼らは携帯メールのやり取りを特に楽しんでいう。直接面会して言いにくい心情などは携帯メールを介した方が伝やすいというのである。また、通話より安いから、親に怒られないということもある。

一方、20歳以上の人はティーンエイジャーと比較し、携帯メールを使う機会は少ないものの、祭日や正月などのお祝い挨拶変わりによく使用するという。また家族への「帰りが遅くなる」などの連絡手段や友人に対してのジョークなどで使われている。一方、20歳以上の使用割合がティーンエイジャーと比較して少ない理由の一つとして「時間がない」「ボタンを押すのが面倒である」などが上げられている。そして、ブルガリア特有のトラブル事例としては、文字の変換操作の煩雑さがあげられる。携帯電話文字は設定が全てローマ字であるため、文字入力時にローマ字からキリル文字へと変換する必要がある。携帯メールを送信側がローマ字からキリル文字へと変換操作を行っていても、もし受取側が同様の変換操作設定を行ってなければ、文字化けが生じるのである。仮に、受取側が文字の変換操作を理解していない場合は、コミュニケーションは成立しない。そのため、ボタンや画面も非常に小さく、見にくい携帯電話の操作に慣れ親しんでいない20歳以上の年齢層はティーンエイジャーと比較して携帯メールの使用頻度が少ないのである。

## 2.3 インターネット

現在インターネットを利用しているブルガリア人は33%である。2004年から2007年の家でインターネットを利用する割合を比較すると、9.6%から19%へとインターネット利用者は増加し、家でパソコンを利用している人口も15%から23.3%まで増え、増加傾向にあることが伺える<sup>3</sup>。その背景には、国外への頭脳流出や出稼ぎの増加があると考えられ、インターネットは親戚や友人などとのコミュニケーションをとる上で重要なツールとなっている。そのためインターネットの利用理由はインターネットメール、メッセージャー、スカイプなど、世界同時通話が可能な通信手段である。一般的に50歳以上の人々はパソコン操作が苦手な世代であるといわれているが、外国に留学や就業した子供とのコミュニケーションをとる動機付けとして、一部の親たちはインターネットを学ぼうとする姿勢がうかがえる。

一方、仕事場でインターネット利用される割合は42%と家庭で使用される割合よりも遥かに高い。その背景として、パソコンは一般家庭の個人負担で購入するには大変高額であり、仕事場においては購入する必要がないことがあげられる。また、仕事場で利用する機会はホワイトカラー層に限定されるため、パソコンを使用したことのない人口の割合が60%にも上り、非常に高い数字となっている。また、パソコンの使用割合の低さの背景についてはパソコンが贅沢品として認識される以外に考えられこととして、パソコンの設定が全部英語なので、英語がわからないと使えないというハードルやパソコン操作を覚えるために手間と時間が非常にかかるという意識があるからである。

子供に関しては、38%はインターネットを利用し、そのうち家でインターネットアクセスを持っている子供

<sup>3</sup> 国家統計局のレポートより。

の割合は 81%、学校で利用している割合は 14%である。このデータから大人よりもパソコンなどの操作に対してアレルギーが少ないということが読み取れる。

## 2.4 固定電話

若年層では携帯電話へと移行する過渡期にあり、固定電話の必要性を感じていないという人が増加傾向である。ただし、携帯電話から固定電話へ電話する場合は通常よりも割高であるため、価格面で固定電話へ電話する場合のみ、必要性を感じるという。

一方で年配層の間では仕事場で必要不可欠という意識も存在しているのも事実である。特に企業や国の施設など信用を重んじられる場合は必要であるといわれている。

## 2.5 手紙

現代のブルガリアにおいて手紙を通じてコミュニケーションをとる頻度は非常に少なくなっている。手紙を通じて連絡をとる相手は、昔の友達や田舎親戚程度である。一方、手紙に対して、時代のノスタルジアを感じる人もおり、ペンフレンドを持つ人もいるという。また、仕事面では手紙を書く場合は、特に国の施設や役所などに対する公式文書を取り扱う場合、利用頻度が高いとされている。

## 2.6 電報

2004年にブルガリアにおいて電報はサービスとしては廃止された。その背景には田舎の村でも携帯や固定電話が普及し、電報を通じて連絡をとる必要性がなくなったということがある。一度も電報を送ったことのない若者は電報というコミュニケーション手段に対する意識が非常に薄い。したがって、この手段を使わない理由の一つとして、時間が掛かるという人が多い。

しかし、70-80年代まで田舎まで電話は普及していなかった時代において、田舎に親戚や実家に急の連絡を取りたい場合は、電報しか連絡手段がなかった。それは今回のアンケートの中でもうかがわれ、昔、電報を通じて田舎の親に「お父さん、送金ください」という電報を毎回送っていたというエピソードが象徴している。